

このコラムでは、これまでの発表場所であったギャラリーや美術館等の空間以外の場所で、現実に機能している空間にアートを持ち込むもうとする活動や、場所や環境との関わりを意識しながら活動を行なっている美術家や美術に関わる方々を取材しています。

今回は、美術作品と場所との関係をめぐり、美術制作と執筆により多角的な視点を持ち活動されている井上明彦氏の最近の作品をご紹介しつつお話を伺います。

(取材：阿部尊美)

『光の部屋』——「インタビュー」井上 明彦

「大佐町光の記憶」Memory of Light, OSA 奥備中風土記館 (Oct.23 – Nov.4, 2000)

小野和則+井上明彦

昨年、岡山県にある奥備中風土記館で、町民から集めた町に残る800枚の写真をもとに小野和則氏と井上明彦氏による「大佐町光の記憶」という展覧会が開催されました。この展覧会を私は実際には拝見していないのですが、資料から、従来の作品を展示する展覧会とは成立の仕方が違っている点に興味を持ちました。「大佐町光の記憶」という展覧会が開催されるまでの経緯は、井上氏によって次のように述べられています。

「……。高梁川の源流に位置する大佐町は、人口4057人、世帯数1184戸、その6割以上が農業を営む土地で、高齢化と過疎化が進むなか、地域づくりの新しいヴィジョンが求められている。このアートプロジェクトは、1999年に同町にオープンした奥備中風土記館の設計者・丹羽英喜氏の推薦により、梅田和男町長が岡山市在住の美術家・小野和則氏に依頼したものである。当初は、同館の壁を飾る作品制作と展示指導を求められただけだが、小野氏は、全町民に呼びかけて過去百年間の写真を集め、それをもとに作品を制作するとともに、今後も写真を継続的に収集してデジタル化し、文化遺産としてアーカイブをつくっていくという構想にまで展開し、町の賛同を得た。それはまた、「作品」や「文化財」の形成のあり方を実践的に問い合わせることでもあった。2000年春に予算がついて公的にスタートし、一件の民家がレジデンス兼アトリエとして用意された。写真収集と資料化には同町源流振興課があたった。私は、小野氏からの協力依頼により、写真をもとにした作品制作と広報物のデザインを受け持った。」(※1)

■奥備中風土記館は、廃虚化していた巨大な木造の牛舎を改築した展示施設。小野氏は、戦前的小学校の記念写真や原爆の写真などをコーラージュした平面作品と古い柱時計を組み合わせた作品を制作し、井上氏は、大佐町の過ぎ去った日々の光の記憶をよみがえらせることを課題として、建物の半分を占める吹抜け部分に、半透過性の光沢のある布による蚊帳状の直方体を浮かせ、内側から2台のビデオプロジェクターで映像を投影し、内側と外側両方で映像を見る能够ができる「光のへや」を制作した。この映像は、コンピュータで写真の細部をスキャンして120シーンを選び、8秒十クロス効果4秒のゆっくりしたシークエンスでムービー化したもの。(※1)

(※1)「京都市立芸術大学美術学部 研究紀要2001 45」より



「大佐町光の記憶 2000」

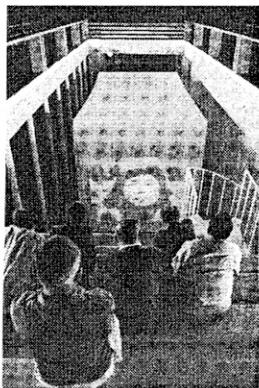
Q1：このプロジェクトの経緯を伺って、まず、通常の展示としての依頼を、その土地に密接に結びついた深みのあるコンセプトに転換された小野さんの発想に感銘を受けました。このような場との関係を考慮に入れたプロジェクトは、これまでに井上さんも行なわれてきましたが、小野さんとはこれまでにも一緒に活動されたことはありますか？

井上：小野さんとは岡山に住んでいたときに懇意になり、いっしょに児島の元染織工場のアトリエを使わせてもらっていたこともあります。しかし、一世代以上も年齢が開き、キャリアがまったくちがうので、二人で展覧会をしたことではありません。小野さんは、長くイタリアやドイツで作家活動をしてこられ、20年ほど前に帰国してからも、数年間日本全国を旅して、その経験や収集品をもとに作品をつくるなど、独自の活動をされてきました。今回は小野さんからの呼びかけに応じたものです。展覧会は二人だけでしたが、プロジェクトには僕以外に建築家や彫刻家、音楽家の方が関わりました。

■空間の散漫さをポジティブにとらえる

Q2：今回のプロジェクトについて井上さんが発表された記事の中で、次のように述べられている箇所があります。

「オープニングの夜、宙づりの階段がはじめて観客席として使われた。町の人々が自らの過去の時間をのぞき込むように「光のへや」に見る光景は、時間の厚みを持った建築空間に映像を含む美術作品を関係づけることの意味と可能性を考えるいい機会になった。」この点について具体的にお話いただけますか。



井上明彦 「光のへや」

■映像と空間の関係に可能性

Q3 : 「光のへや」の制作・展示を経て、意識された点に何か変化はありましたか？ あるとすれば、どのような変化ですか？

井上： 作品面では、僕は映像作家ではないので、自分にとっての関心は、映像の内容以上に、映像が空間の中にどのように存在しているかということなのだ、ということにあらためて気がつきました。映像と空間の関係はまだまだ未開拓の可能性があるように思います。

また、文脈面について言えば、町の予算で、町の人たちからお借りした写真をもとに作品をつくり、廃墟を再生した空間で町の人たちに作品を見せる。これは初めての経験でした。町の人とわれわれのあいだに立ってくれるコーディネーターやプロデューサーもいません。これはすべて手作りする面白さがある反面、たいへん気疲れすることです。町の人口の一割を越える方々が見に来て下さいましたが、こういう公共的なアートプロジェクトは、やはり自治体側によき理解者や支援体制がないと、こちらの消耗が激しいことを痛感しました。

■建築空間から構想する

Q4 : 場所との関係では、特にどのような点を意識されましたか？

井上： 美術展専用の会場ではなく、未完ともいえる巨大で開放的な木造空間、しかも外光の変化が直接内部に反映する不安定な空間です。町からお借りしたビデオプロジェクターが古いもので照度が低く、映像が見づらいことも不安でした。しかしそれより魅力的だったのは、2層分の吹抜け空間とそこに宙づりになった階段でした。通常、床が単層のギャラリーとちがって、そこは人が自由に昇降や巡回ができる、大きな視角の変化が生まれます。これは得がたい条件です。自由に入出力可能で、二つの映像が内からも外からも見ることができ、黄色のメッシュの天井によって上下の視覚の交換もできる半透明の「へや」の構想は、この建築空間から生まれました。

■芸術はすでに存在するもののへの敬意の払い方

Q5 : 井上さんの作品は、ある場があって、そこから何か微妙なものをすくい上げようとしているような印象を受けます。その空間の関係というよりも、そこで起きてきたことや

今起きようとしていること、そこに立ち会っている人の意識自体を未分化なまま作品として捉えるというような。そのような存在の仕方への興味が井上さんの多元的な活動の発端になっているのでしょうか。

井上： そう見ていただけるとうれしいです。アーティストの中には、能動的にどんどん自分から主張していく人が多いですが、僕は受動的にある何かに対応し、関わっていくなかで作品の起点を見いだしていくタイプです。作品にしても、何か豪勢で一方的なものは恥ずかしいし、どこか間の抜けたところを残しておきたいのです。その意味では自分はアーティストと名のるつもりもありません。これは大阪の庶民的世界で生まれ育った人間の「芸術」への気恥ずかしさから来ているのかもしれません。芸術作品よりも、現実に生きている場所や人、そして自然の方がはるかに潜在的な力や可能性に満ちていて、芸術というのは、すでに存在する特別でないものに対する敬意の払い方だと思うのです。僕はそのことを、すぐれたアーティストたちから学びました。



「光の記憶2001」

今回の展覧会に関連し、今年10月25日（木）～11月7日（水）に倉敷市のSalon de Vamhouに於て、小野和則・井上明彦両氏による「光の記憶2001」が開催されました。

井上明彦

1955年大阪市生まれ。1984年京都大学大学院博士課程中退。グラフィック・デザイナー、美術館学芸員、岡山大学助教授を経て、1995年より京都市立芸術大学助教授（造形計画）。1993年～95年、岡山市内の廃ビルを利用したアートスペース「自由工場」の運営に参加。主な作品に「時間のレッスン」（1993、アートスペース虹、京都）、「RED BACK PROJECT」（1996、大阪市平野区）、「眠りのレッスン」（1997、エスパス21、松山）、「ANOTHER WATER -めぐるもの」（1997、大阪市平野区）、「瞬間移動」（1998、大阪市平野区）、「AGAR-AGAR」（2000、テンバA、大阪府豊能町）、「光のへや」（2000、岡山県大佐町）など。主な著書に『芸術理論の現在』（藤枝晃雄・谷川渥編、東信堂）ほか。